

第二十二號

文明之母第二十二號目次

本誌は毎月二回三日十八日に發行す

本誌は前金に非されば發送せず

本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢

全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字二十三字詰」當り左の如し

	(回壹)	(二回以上)
壹行	金八錢	金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌代金御回送の節は內國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割增

本誌の前金將に相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

版權所有

主筆　大矢森之助

發行兼編輯人　中村一　東京深川區諸町十三番地

印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地

發行所　生文社　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地


鮮斎永濯

文明之母第二十二號

明治二十三年四月三日發兌



○雜説の二

同權は戻れり

服裝を以て論ずれば女子は其階級に由て處女、妻、寡婦等各々皆な其異にする所あると見るなり此異裝は男子にも階級に由て古は之れありしと明かなり然れども文化相開け東西相通ずるの時世に於て男子の服裝は何れの階級を通じても其大体は皆同樣なり是れ女子は一家族を以て世界となす者なれば其家族に於て應用する者を以て世界に示すなり

夫れまた男女其服裝を異にするは抑も何の故か蓋し女子の服務は飽くまでも男子と相異ならざるべからざるなり今ま若し女子ありて其保守の性質を打破りて男子の

服裝を採らむか嗚呼夫れ不羈粗暴なりといふの外なし

乃ち飽くまでも女子は男子と其被服を異にするは古今長久の天地を通じて然り。獨り之を異にするのみならず進んで常に自ら貴からんと欲するの野心あると自主の精神なきとによりて終始其流行を追はざるべからず今ま若し男子ありて服裝の流行に仮々として是れ從ひ以て之を改むる者あらば嗚呼是れ男子にして女子たるのみ

位置よりして論ずれば男子は縱令ひ一匹夫一布衣なりとも賢德を以て身貴人に交り言王侯を動かすを得べし然れども一家の女子は縱令ひ精神の英俊にして淑行女德あるにもせよ才智非凡なるにもせよ寧ろ一家に蟄居する者にして天下に發揚ける者には非ず而して其位置は元來其夫の位置によりて定めらるゝ者にして始めて夫人某子杯と尊稱せらるゝ者にしあれば女子の位置は常に第二の現象なり夫れ牧豎は以て王侯となるの際會あるも農舍の一孃子は容易に以て貴女となり得べきか

自ら社會に率先して議論を唱導し公衆に向て多辯を振ふ者あり議事堂の聽席に終日坐して國家の議事を聽き以て自ら社會の女雄と稱する者あり是等の女子は家に在て事を理するを知らざるの人にして女子の職務を解せざる者なり嗚呼肩を聳かし濶歩して以て男子の權理を壓倒せりと思ふの女子は寧ろ髑髏となりて『我は人間なり而

して前世には男子まてありし』と廣言するの快なるに若かず」思ふま男子にして女權同等を論ずるあれば此れ社會の通理に迂なる狂のみ。女子にして之を談ずるあれば此れ勿論迷なるのみ

夫れ然り而して亦た何如なる人種を問はず已に小兒の時代に於てより其遊戲よは兩性上精神智能の差等を現せり童兒は原動的なり軍陣的の遊戲を好み盜賊兵卒等の所行を嗜めり見ずや彼の女裝したる「アヒルレス」（希臘古代の勇將）も亦た劍を把りて女兒中に馳驅せしを而して女兒は人形、鏡、化粧、衣服、舞踏等を愛するのみ亦た長じても人の妻となりしとても一に稍々此時代の一小進歩せしのみにて嗜む所ろ小兒の時と異ならず

女權論者は云ふ如く精神上の關係に於て或は偶ま同等なるのみならず女兒の如きは童兒に比すれば早く已に成熟し彼の十六才の女子は同年齢の少年より精神智能の發育優等なるは誠に然り。然れども不見や自然高等の位置に立てる植物すら愈々高くして其成熟は愈々晩きと。……之と同じく童兒は女子よりも精神身体共に晩成の者たり而して女子の成熟は頗る早く其發達や一定の時期に止まるなり嗚呼遲々澗畔松。鬱々含晩翠。此晩翠は乃ち男子の謂なり

ローレンツ、フホン、スタイン（墺國政治經濟の大家）が言へる大概に曰く「嗚呼夫れ幾千

年來の歷史を見よ我人間社會に於て果たして其歷史は婦女子が性狀行實等に深くも立ち入り善くも數へ了りたるや否や。嗚呼彼の歷史眼に長ぜる巴黍人が嘗て古代萬般の事實に向て婦女子に付き喋々せしや否や。今は昔しペチロペ（希臘の勇士、クレタ王チザッツイスの妃）美人なりしともライス（希臘女豪の一）麗容なりしともクレオパトラ威權ありしともメッサリナ（羅馬帝「クラウヂュース」の后）不德なりしとも彼等は歷史上に於て深き心慮ある人。智識ある女子なりと記臆せられしや。アリストテレス（希臘の大哲）は男子は强く政府は大なりとの百原因を擧ぐることを知るべきも女子の精神上の生活何如其運動何如には着目もせずまた敢て之を知らざりしなり。プラトー（希臘の大哲）すら人間の思想、知識、政府等の理想は能く知りしならむ。然れども婦女子の其等の事はえ知らざりしなり。彼の戯曲詩家の大小とを論ぜずソフォクレス（希臘の大戯曲詩家）すら猶唯一個のアンチゴチ（王チエヂプスの女なり王身破れてアンチゴチ。王をアッチカの地に導きクレオンが禁を侵して德巴の役に戰死したる兄ポリチイケスを葬り遂に爲にクレオンが憤怒を蒙り生ながら葬られたり）。を知りしのみ。然れども皆な女子と動因（モチーフ）としては知らざりき。故に當世の戯曲は花なき實に異ならず冷かにして明らかなり堅くして歷史的なるのみ。

中古に至り「トルバドユールス」なる者ありて婦女の愛を絃歌に上せ「ミンチセンゲル」な

る歌人ありて戀の道を街頭に唱へ是に於て始めて彼の愛戀といふ文字を生じ來り以て男子の半生を支配するに至れり男子の幸も不幸も之に由て起り其婚嫁は衆多の爭の名義となり原因となり遂には國の存亡迄も關するに至れり今や國にのみ力を振ひたりし男子は女子に向て感せねばならず生活せねばならず叉死せねばならず十八世紀の終りにはウヰルテルあり（ウヰルテルハ獨乙詩家ゲューテーの作にして專ら熱情の事實のみを賦せり）て遂に愛は詩學の一要素とはなりぬ……唯々社會の一要素となりしのみ男子の半生を快樂にし富贍にせしのみ女子は啻に詩賦の術藝にのみ尊ばれたるに至れり其他は余は知らざるなり嗚呼余は彼の生理學者と共に腦の重量に付て女權を爭ふを欲せず。余はいふ女子若し職業を司どり事務を操るならば眞正の職務……婚姻匹偶……は決して是れ能はざるの現象なりと好し終日文庫の傍に坐し裁判官の机卓に凭り戯臺の上に翩翻すとも其狀態は榮譽なるに似たるべけれども是れ眞正の女子には非ずして人の妻人の母とはなれぬなり。故に一言の之を蔽へば同權論者は婚嫁を非とそる者なり乃ち人倫を破壞するなり嗚呼社會の考察を荷擔する者は男子なれども社會の感情を荷擔する者は女子なりけるに女子も亦た社會の考察を荷擔せんとは………

と論趣頗る妙なるに服すなり

五

猶は進んで思慮すれば何の故ぞ女子の教育は其教授の方法に於て男子と相異なるや而して亦た女子には特異にも生殖上の關係ありて懷姙分娩產褥乳兒養育等の一生涯兀々として負擔すべき事實あり今暫く此生理的の作用を以て同權論を駁するを休止して更に心理學上に於て一大觀察を下し去らば益以て同等に非ざるを見るなり……云ふ次に獨逸哲學の泰斗ロッツェ、ショッペンハウエル、ハルトマン等が意見を陳するあらんとす



育兒衛生法

醫學士　關場不二彥述

衣服、溫浴(一)

猶は垂乳根の肘に打ちもたるゝ其みどり子は誠そたうとき水に漾へて神聖なる蓮華に比ぶべくあり。神の氣を呼吸し其御光に照されつ。自は罪なき垢なきうつくしき身とはえりせで最可憐の風情なり

或は不注意なる殘酷を去り或は懦弱なる贅澤を遠け以て小兒を天然の理學上に隨つて敎育養成するは是れ生活の需要に適當なる生存の原理なり此責任たるや誠に慈母の手に在るなり何如んとなれば啻だに其種屬を增殖し或は分娩の作用を以て女子の義務と定則とを完了せしとは云ふべからず。小兒の第一敎育なる此一大人道美麗なる責任は体育にも智育德育にも一に敎育の心得ある婦人の職分なりとす

ジュリュース、ストルム

玆に先づ体育を論ド其分娩してより初めて齒生ずる時迄の養育法を述べんとす即ち殆んど小兒が第一歲の頃にして其注意すべき箇條は殊に簡單にして各慈母は之に從ふ極めて容易なるべし然れども其注意の何如に據りて小兒の發育すると否とは相關係するとる忘却する勿れ。

今ま稍く生れ臍帶を截られて始めて母体と相離れたる小兒は先づ温かき產湯の中に入るなり而して小兒の皮膚を蔽ふ脂肪を洗ひ落さゞるべからず此脂肪(西洋にては酪樣粘体或酪樣漆等の命名あり)は胎兒が皮膚の脂肪腺より分泌せる者にして小なる皮膚の剝屑と混ドたる者なり

産湯　湯の温度は攝氏三十五度にして血温と殆んど相似たる者を可とし赤兒は五分時間此の中に浸し洗ふべし而して些少の温度變換には頗る感じ易き者なれば極めて注意して湯盥より出すべきなり其時には預め前に煖め置きたる衣服を以て盡く其体を包み柔かに徐ろに盡く水分を拭ひ取り始めて煖めたる蒲團の上に臥せしむ否せずして冷かなる空氣杯に觸れしむるときは容易く粘膜の刺戟を起し感冒或は咳嗽の原因となるべし近來の試驗に據れば攝氏三十六度有餘六の温浴を作さしめたる後ちは小兒の体温二十分を經て大に沈降し又攝氏三十二度半の温浴の後ち体温は殆んど半度餘も下れることを發見せり。湯水に〇、二乃至〇、四割の食鹽を入れて温浴せしむる時は体温下ること少しといふ

小兒の蒲團を煖むるには其分娩後第一二周間は「湯タンポ」を以てするを宜しとす抑も蒲團を置くよは其寢籠なり其寢臺なり小兒の顔面は光線に背くを以て規則となすなり彼の羞明は大に眼よ害ありとす故に餘儀なきときは羽衣を頭上に挂け置くべしかくするときは能く睡眠するのみならず亦た塵埃。蠅杯も避け得べきなり然れども保侶に非ずして直接に布帛手拭などを頭に被せれくは宜しからず新鮮の空氣の交代するを妨げ自ら蒸發したる汚氣の爲に面よ發疹し或は頭上に充血せしむると少なか

らざるなり亦た小兒の自ら動いて被(かぶ)せたる手帕の面上に蔽(おほ)ひ蒙(かぶ)り尤も柔軟なる眼瞼(まぶた)を刺戟するともあり

温浴ハ日々せねばならず

而して井水にても天水にても河水にても宜し注意すべきハ次の條々なり

小兒を餘り熱き湯に浴すべからず往々暫かに手尖(てさき)を入れて温度を試みるとあり太(はなは)だ誤れり如何んとなれば手尖は屢ば熱き湯に慣れて之を感せず正確の温熱を知る能はざればなり故に臂を全く湯水中に入れて試みるべし或は寒暖計にて計るも可なりとす

熱に過ぎたる湯水にて沐浴せしむるときは其結果として容易く感冒を催うし發疹を來し時々熱を生じ牙關(あご)の痙攣(ひきつり)を致すと少しとせず

小兒朝に睡眠より覺め來り乳を飲み畢れば先づ沐浴せしむべし然れとも其眠(ねむり)を覺し直ちに之を洗ふは宜しからずまた乳を飲ましめ直ちよ浴せしむるも不可なり乃ち三十分時を經過して湯盥(ゆたらひ)中に入るべし其尤も善き法は小兒の全体を盡く湯の中に浸すなり勿論頭は產婆の掌(たなごころ)の中に休みて湯には入らず上體は下體よりも高きなり是に於て便利なるは頭髮も洗ひ拭ふとを得る是なり

注意すべきは湯水の……汚れたる水の……眼中に入らぬ樣になすことにして種々なる弊害乃ち眼病なども容易に起るなり

小兒の全體を洗ふには堅き手帕(てぬぐひ)は太だ惡(わる)し尤も佳なるは柔かき海綿或は「フランネル」の片(きれ)或は「モムパ」などなり殊に眼を洗はんとするときは淸き柔かなる麻布(リンネル)を全く淸潔なる水に浸し以て外の眼眥(まじり)の方より內の眥の方に洗ひふくべし決して內の方より外の方に拭ひ取るべからず何如んとなれば內の眥には「眼ヤニ」など塊まり居ること數〻なれば往々之を眼蓋(まぶた)の間に入るゝことあり。若し眼ヤニなどいふ粘液の乾きたるもの着き居れば先づ之を洗ひ去り而して後ち眼の緣を淸べし

小兒を湯より出すときは可成(かな)り煖めたる毛布(フランネル)にて拭ひ乾かし枕に着かしむ而して之に衣服なり蒲團なり被(か)け置きて後ち乳を與ふれば心よく睡に就くなり「沐浴せしめて後ち直ちに之を空氣に當ツるハ是れ感冒の大原因となるなり。空氣中に出すにハ少なくも二三週間立ちたる小兒にてハ不可なり嚴冬ならば六八週間ハ經たるに非ざれば宜しからず。已に三四ヶ月經て季節また炎暑なるときハ湯水の温度ハ攝氏三十五度よりも低きを適當とし三十三度迄も下すことを得べし蓋し一々醫士の監督を要すなり。

賞用すべきは黄昏に當り温湯に沐浴せしむる事にして是れ獨り身體の塵垢を拭ひ取る爲のみならず小兒の全體は盡く善く暖まりて小兒は快よく柔和なる睡眠に陷ち入るなり

彼の世上に於て頗る好評ありし冷水の沐浴は最初十二ヶ月の軟弱なる小兒には適せぬなり

日々の沐浴に得堪ず各度其後には粘膜の加答爾性なる刺戟を起し咳嗽を發し鼻涕斷へざるものあり又眼病に惱むものもあり此等の小兒は皮膚甚だ柔軟にして髮毛は薄く紅色を帶び粘膜も其性弱きに過ぐなり乃ち沐浴は宜しく一週間に一二回となし夜間を以て之をなすべし沐浴せしめたる後は直に臥床せしむなり而してまた身體を清潔ません爲には朝夕「フランネル」の布片にて微温湯もて拭ひ遣るを可とす

殊に注意すべきは小兒の頭髮。頭皮を清潔になすとなり小兒生れて最初の一二週或は初めの月に於て皮膚脂肪腺の分泌烈しき爲め汚穢よ灰白色なる浮漚剝屑の襯着せると屢〻なり。特別に前頭或は頂門上に於て甚しとなす。是れ日々石鹸水にて頭を洗滌せざるに由てなり。若し此剝屑をして長く附着せしむるときは頭皮よりする蒸發を妨げ毛髮の發生にも及ぼし遂には膿疱性の皮疹を生ずるを促がすなり故に先づ

洗滌を怠らず阿利襪油或は偶利設林にて軟脆にし又は卵子の黄部にて洗ひ落すなり
此の如くすると數日にして頭皮は健全となるべし



五色秋歌

青

河竹の葉越の色にまがふかな玉の簾よかくるわふひれ

徳大子公純

黄

枝かはすきさじの山吹花散りて黄金の露に涙ぞこぼける

三條實萬

赤

しぐれつる雲も日陰よ染られて紅葉を下す峰の木枯し

三條西季知

白

冷泉爲全

白雲の八重立峰の山櫻空にもつゝく瀧つかれ風

黑

綾小路有長

烏羽玉の闇の現よかきやれどなれてかひなき床の黑髪

遷宮わらせ給ひしとしかしこくも伊勢神宮に新なめの
勅使つかへまつりて

宮地嚴夫

新宮にこの新なめのみてくらをさゝけまつれる今日めかしこさ

滊車にてねふりたる

仝

うまゐして行とも知らす行たひの旅ともなき君かみよかな

蜀魂詠史詞合序

小中村清矩

山てらの灌佛をがみて歸るさ。卯の花くたしとか。村雨の俄にふり來て。かつく袖さへぬれとほりければ。野末なるあやしの小屋を。しばしの宿りと立寄りて。たきさしたる藁の火に。そはてる衣かわかす程よ。はやくわらふたの上にあくみゐたる男あれり。我と同しさまに雨にこうじぬる人よてそと見やるよ彼も言葉がたき求めま

はしき折にやありけむ。何くれと語ひ寄りて。あからさまながらしたしふなりぬ。空の氣色やゝ晴かたになりて。軒の玉水おとたひくなるころ。花橘の露ふきみたりて。匂ひくる風にやさそはれけん。杜宇の一聲さやかゝ鳴きたる。初音まさへわなれば。いとめつらかにて。雲井遥かに今ぞ鳴けると。しのびやかに口すさむを聞とかめて。ぬしは風流好み玉ふにやといふに物の心しりわくへききはにはあらねど。折からをかしきさまみすぐしかたうて。すんじがちとか昔の人もよからぬ例にいひけむあはつけさを。聞しられけむやさしさよ。さばれかうやうのあはれを。みすぐさん人は世よ少なくや侍らむそこよもおはすやうあるべしといへば。おのれとても月花をあはれと思はぬにはあらねど。わかき頃より書みることを好みて。明くれにすこしのいとま惜む癖なん。あやしう立そひつゝ。あはれとうたひ出るひまなんなきと賢しげにいふが心にくゝて。去らば今しばし晴間待たんほど。かたみにいたづらごとのみいひてあらむよりは。かゝる暇よなりとも。ぬしはぬしの好める書どもの中にみえたる昔し人のうへの。ゆかしともなつかしとも思さん事を。三十文字餘りにつらね給へ。已れは今鳴つる鳥の聲の。此日ごろ待ちかねし心の樣々なると。うち出で侍らんとて。おの〳〵よみかはせる言の葉。そこばくつもりぬるを。かくて散

さんもあたらしかるべし。歌合につかひて。今の世の宗匠といはるゝ人よ。かちまけ定めさせんはいかにと進みいへば。しかよからんとうへなひぬ。世の人の木に竹を繼くとかいふめるわざに似たれど。これもまたひとつのふしと許されなんやとて。ふところ紙よやう〳〵かき記せると。つき〴〵のごとし。

〰〰〰〰()○()〰〰〰〰

めのとの草紙のぬき穗（めのとの草紙は足利時代の者にや博學の人の教を待つ）

御額と中は女の顔の頂上にて候へば。なりよくけしからず。高きもうたてあり。あまりひきゝも品なし。ちと高きかたによりたるが男女共に見よく候

目は人の顔のうちのいきものにて大なるもちいさきもいきはひ異なるものにて。さのみ思ふまゝに見いたし候へばよき目つきもおそろしくなり候。わろき目付なれともなつかしううら〳〵と見出し候へばよく候

鼻は人の顔の中にさし出て高く目に立つ者にて候。わひかまへて〳〵しろくれん化粧候ましく候さし出てみよくきものにて候。

御口はよくもわしくもてなしにて御入候。いかによき口付もおもふさまに。笑み廣げ。喉の穴見ゆ。舌の廣き。口わきよりあぶく垂りて。ものいへば。いかに美

十六

しき口付もあしくなり候。またあしき口つきものと〳〵と物うち言ひ又をかしき事もうちゑみたる。にくからず

男の衣裳みくるしきは。上下よよらす女の恥なり。いかにも衣裳を御たしなみ候べし。昔より女房は男をしつし思ふものなり。愛染。辨財天みな男をしつし玉ふなり。

いかにも夫のためみぐるしからず家のうちけ高く。すみなさせ玉ふべし

（以下嗣出）

秋之夜酒漫筆

鈍酒風流士草

思量し去れば人は情種に非ずといふとなし。宋廣平が鐵石の膓も風流にして梅花を賦せり。所謂る五色の靈芝を咀むて香は九竅に生じ。三危の瑞露に咽びて美は七情を動かすといふ如く。屈源が離騷も美人芳草を假りて。傷神國を愛ひ幽愁情よ逼り悲哀涕涙を催うすなり。嗚呼思量し來り思量し去れば彼の杜少陵は尤も摯情の人なりしなり。松柏を邙山に念ひ故交を旅襯よ哭し弟妹の流離を悵み。妻孥の阻絕を懷ひ。或は憂心忡々として麻の鞋に天子を見。衣袖は兩肘を露はし。意を當世に得ずして坎壈其身を纏ふ。勤王の忠義。嗚呼哀痛せざるを得んや。塵再び褁りぬ材の

大なるは用ど爲し難し。茅屋も風の爲に破られぬ。志士幽人怨嗟する勿れと其辭は幽悲よして金石も爲めに泣き。豫章は風を翻がへして白日動き。鯨魚は涙を跋むて滄溟開かなむと其句は沈痛にして豪宕なり人は其經歷の坎坷多きによつて其詞賦も亦た酸嘶を極むるなりけり。

意匠と境遇そ此の杜工部の如くなれども奇才と詞賦は勝るも劣らじと思ふなる獨逸の詩人西列は身權貴の門には生れざりき。賤か山里に人となり其少年の時はいかにも粗暴にてありしかども。幾許の艱難は磨いて玉となし世運の亂離は鍛へて莫邪となしその詞賦の思想は駿馬の奔るがとく。飈風のさかまくがとく。天より落つる奇搆多かり。その憤怨の衷情は絲竹に上りて、いとも纒綿なり。古を懷ひ今を慨き。人情の冷熱は美麗なる詞を以て輕妙に嘲罵し。世味の甘酸は温度なる字を以て跌宕に描寫しぬ……………さりとて徒らに筆硯を弄ぶべきならねばとて。千七百八十七年七月卯の花盛り。杜宇なく曉に。ドレスデンなる故人の寓居を立ち出でゝ青山に分け入り綠樹に憩ひ。ワイマルといふ都府に入り國侯カール、アウグストに謁を求めしかど侯は折合しく漫遊せられ留守のみなりけり。侯は人となり才學に富み。厚く文士を招聘し。殊に高惕の如き大才を當時に任用し。能く忠誠の言を容る。加之侯妃

十七

アマリアも亦た文學を愛し夙に西列の詩篇を誦し大に其才學を欽仰せり。かくて西列が門前に伺候せしと聞き之を招き、果ては宮庭にて文學を講話する無二の朋友とは爲しにける(當時高惕は以太利に旅行して不在なりき)

このとき侯妃及び侯の顧問にはルイゼ妃、上臈頭夫人スタイン氏。並にシヤロツテ夫人(謝妃)。などいふ賢媛のありて古今の美術詞學文章等を講究し。文士にては嘗てウイランド。ヘルデル等著名の人物宮庭に集まり。十八世紀ヱは獨乙文學の中樞は撒遜ワイマル邦なりとぞ言ひはやしける

この謝ルロツテ夫人(謝妃)といふは哥敷子の夫人ヱして容姿世に勝れたり今は寡婦となりて意のまゝに學問を勵みたるが。西列を知りてより。戀々措きがたく。花の晨。月の夕。絃を彈じては西列が作りたる曲を唱ひ。栘を轉じても西列が賦せし詞を歌ひ。秋波に寄するは嬌なる思ひなり。花月に寓するは艶けき情なりけり。西列は之を悟らざるにはあらねども。平素秉る所ろ堅くして德義を守り。禮讓を重んじ浮きたる心とて更になく。遂には之を遠けて物もいひよらずなりにけり。

然はあれども。内乘堅孤にして登徒子の比ならぬ趙君瑞も亦た崔鶯鶯の爲に乱れたり。とゝに西列の幼なかりし時。西列を愛撫し且つ萬事に付け注意せし夫人ありぬ

世にウォールツチーゲン夫人と稱し。賢德四方に聞えたり。其夫人に一子あり西列とは小學よりの知友にして漆膠の交いと密なりけり。時はしも秋くれて早や臘月とはなりぬ空は曇りがちにて晴れやらずチコーリンゲル山には雪深くして山おろしの風肌を裂く許なり。西列は深き帽を被りつゝ烟草吹きつゝ孟浩然が詩肩を聳かしウォールツヲーゲン生と驢を騈べ徑路さへ分たぬ雪を踏み。ルードルスタツトなる都會に住めるウォールツチーゲン家姻戚の蓮ゲフェルト氏の家を訪ひ行けり。蓋し舊交を再び修めん爲と聞えたり。蓮家には其寡婦と二人の女子のみにて長をカロリナ(嘉妲)。次をシヤロツテ(謝孃)とぞ名乘りける。

蓮氏の二女は古への雙喬にも劣らず謝家にも讓らず才色雙絕にして文章詞賦の學に通じて比隣には其儔なし。今や佳賓の坐にあるあり燈を剪りて。古今の文學を論じ又ハ翰墨を弄して無上の娛樂となしぬ。於戯西列が鐵石の膓も今は赫火の爲に銷なんとす……プルタスのある間はシーザルは死せねばならず……西列は切に謝孃を慕ひてけり。

千七百八十八年の春にいたり。二孃と互に尺牘を取換し。春を傷み恨を賦し落花無情にして流水意あり。其年の五月西列は居を蓮家を去る一里程なる一村邑に移し

ぬ。著作文章を以てこの世を送らむと茲に和蘭興亡史を著はし。數多の小說を書し又希臘神賦といふ一長篇を咏出せり。また謝孃の爲めに希臘の戲曲伊弗克尼を譯せり。

煙は白芍藥に籠めり其淡泊なる粧は謝孃に比すべきや。露は紅芙蓉を浥せり其濃厚なる飾は謝孃に勝れりや。秋月の玲瓏なるも。春雲の窈窕なるも何にとて孃が丰神態度なるべき。嗚呼薔薇架畔の月の夜は是れ野乘を著作する脚本なり。海棠園裡の雨の朝は却て戲曲を扮飾するの骨子なり。春くれて夏も半は杜鵑の聲と共に老へんとし綠蔭の濃なるや椅子に憑りて晩凉を容るゝの頃ひとはなりぬ誰と共にか打吟ぜんと影だに西列は見せぬは訝かし。若しやいたつきもやせるか著作に餘念なきにやと憂に沈みくらしつゝ腰圍幾許を減却せしなる

夏の日の長き端なくして是れ悃悵なり。忽ち聽く籬畔の柴局蕭然として開き。徐ろに落花を蹈み來るあるを。則ち聰を推せば風は籬柴を敲くなりけり。微に人を呼ぶ者あり。戶を啓けば栖める鳥の月に驚くなりけり。果實標ちては西列が跫音。栢葉飄りては西列が衣影かと。夢影現はれ幻象來る夫蜘蛛に我夫君の來べき夜半をも占ひかねて。空しく天も無情なりけるよなと喞つとき。姉なる嘉孃が聲には謝姐謝

姐と呼ぶあり。出でゝ之を見れば思はざりき久しく羅馬よ赴きたる高惕よてありぬとは

高惕は累世富貴なる門に生れ。英才其儔なく容姿魁梧にして豐腴端麗なり。瑞西、以太利を漫遊し。歸り來りて舊識避氏の家を訪ふ。嘉孃人をして西列を招がしめ。高惕に謂ふ。頃者一秀才を識り得たれば之を紹介すべしと………已にして病に癯せ貧に衰へ蓬髮蒼顏なる少年の一揖坐に入るあり。問はずして是れ西列なると知るなり。

坐定まる……嗚呼兩詞雄は佳人の紹介にて一堂よ會談せり千古の遭遇稀世の絕奇といふべきなり……豐腴の人に對する此瘦癯せる少年……中間に花の如き佳人……周旋せり……嗚呼奇遇なりけり。……始め此交は中々に折合ふべく見ゑざりしなり。西列は其知友ケユルナルに書を寄せていふ高惕との交際は如何なりゆくべきや料られず。余の奇なりと思ふ所ろ彼已に奇とせず。余が熱望する所ろ彼已に經歷し去り才學も該博にして及ぶべくもあらず其風采といひ余とは異なり。其思慮といひ余とは差ありと思ふなりと。然れとも之を考るに此會合は後年（一七九四）に到り刎頸の交を交ばしめたり而して高惕を知る者はひとり西列のみと迄言はしめたり夫れ兩詞雄

が年齒十歳を隔つるゝも闘せず相率ゐて倶に文學壇上に駢び立ち。力を合せて斯學を振興し互に相裨補して。彼の所謂る「颶風怒濤の時代」を形成せしなり。嗚呼遮氏の才女其名兩雄とともに滅びず

かくて西列は以爲らく蓮氏の雙璧孰れか是れ我掌上の物なるべきと而して謝孃は遂に其璧となりしなり。嘉孃は後ちウォールツォーゲン生維廉(上既頭)に嫁し西列が傳を著はし其名一世に喧傳せり(千八百四十七年一月十一日死)

此とき謝孃の朋友に石城夫人とて上既頭の夫人ありけり名を同じくシャロッテといひ(謝夫人)當時絶代の佳人と稱せられラファエルの彩毫にも上し難かり。而して高惕は之と情交深かりしが常に之を以てシェクスピーア翁と並び稱しける嘗て呼びていふ。李婉。卿は美麗なる宇内の尤物なり。維模。汝は玲瓏なる蒼穹の宿星なり。我れこの世に生活するは一に卿と汝に謝するなり。と李婉は夫人を指し。維模はシェクスピーアを謂へり

謝孃は居常西列の事のみ考へ居り。其位置の定まらぬをもて之と石城夫人と物語り。高惕に依頼して。王侯に薦められんとゝ懇ろに望みてけり。當時西列は和閑の史を著はし畢り。身閑散なれば糊口の資に乏しかり。まして其戯曲と作りても戯場

の座長は中々に報酬とて贈り來らず。屢〻之を促しても應ぜず。貧は益〻逼りて窮鬼追へども去らず。病は時に起りて苦惱多く。謝孃も幾たびか鶺鴒の姿と典して其折々を助けたりしかど。大材實に用ゐるの人なく。如何ともなす術なかりけるが。幸ひ石城夫人は親しき友なり。重く任用せらるゝ高惕は其提唱する所なり。依賴するに如かずとて。遂に高惕に説かしめたり。高惕も勉めて堅き位置得させんと書をカール、アウゲスト侯に上り。其意を陳しければ。千七百八十九年の三月西列は義奈府大學の無給助敎とはなりぬ。西列も始めは之を辭したれども。已み得ぬことにしわれば此職に居り。歷史を講じける。學生より納むる贄にて稍々口をも糊したれど。聽講者の數漸々に減じて。生計もやゝ困難となりけり

其年の十二月西列は謝孃と婚するの約を結び。而して位も議官に陞り年々俸給も增加することゝなり千七百九十年二月廿二日遂に婚を擧げぬ。西列時に年三十一歲なりけり。謝氏四子を生み。西列卒して二十一年を經て身まかりぬ、（完）



束髪色風琴

漣山人

其一　もめん綿

下　尻に帆掛て雲霞（其下）

さア如何しやう？　＝何分氣づかひに候へば天氣都合にて明後日出立可致候＝此文言ではどうしても入らつしやるに違ひないョ、天氣都合で……。れ天氣は今日の按梅では好いにちがひない、れ天氣さへ好ければ、明日の朝東京を立て、午後にはきつと此地へ、アヽどうかして明日れ天氣が惡くならないかナー。雨でも降るか風でか出るか、明日も明後日も……。とした處でどの道此地へ入らつしやるには違いないのだから――困るナー。折角日比さんとも交際の出來る樣に成た處へ、今れ母さんに來られちやア。――れ母さんには親類と云つても通らないからナー。どうしても

別々にならなけりやならない、さうするとまた宿屋の者に對して極まりが惡いヨ。今まで親類だと云つた嘘の皮が、まるで現はれるから、なんぼ田舍者だつてきつと變に思ふだらう、それもいゝけれど、ひよつとしてお母さんに云付でもされては。アヽ困るナー、いつそ何も角も打ちあけて……。イヤ〳〵それもまだ早い、さうしたら却て疑はれるだらう、それよりは學校の先生の……さうだ弟だと云つておかうか。それも變だナ、お母さんはふだんから妾が男と交際するのを、嫌な顔して居る位だから、とても自由結婚なんぞ承知する風ぢやない、中々頑固だからナー……でも斯うなつたもの仕方がないから、矢張り先生の弟にして置くのが一番だらう……。今に日比さんとも相談して見て。他によい考へでもあれば……

　思案に呉れて居る處へ。

「アヽいゝ心持に成た。

廊下から大きな聲をしながら此時日比は湯から出て來て、

「本間さんお先へ。實にいゝ心持ですヨ。早く這入てらつしやい。

「お湯處ぢやありませんヨ、人の氣も知らないで。

「オヤ、大變な權幕ですナ、一體何うしたんです。

「此を見て下さい……何か好い考はありませんかネ。
手紙を日比の前へつき出した。日比は取りわけてズッと眼を通して見て、
「なる程、れ母様ですネ。うまい、中々能書だ。
「そんな事はいゝからはやく讀で御覧なさい。
「ドレ、讀んでもいゝのですか……。アヽ熱い、まづ汗をふいて……、何々一筆申入候
「そんなに氣取らずにさ。冗談ぢやありませんヨ。
「邪見に叱りますネ。そんなら音なしく讀みましやう。
口の中でざつと讀で見て。
「成る程、れ母さまが此地へ入らつしやるのですネ。
「ヘア、だから弱はるんでさアネ。何かよい考はありませんか。
「よい考つて……？
「貴君も氣樂だネー。考て御覧なさいナ。今家の母に來られちやこまるぢやありませんか。
「だつてそこは親子の情だもの、可愛い子を、しかも病人の子を、一人遠方へはなして置いては、御心配なさるのも無理はありません。

「それは貴君のおつしやる通り、母がかうやつて種々心配してくれるもののことですから、それを困るのなんのと云つちや、實に濟まないんですけども……。だつて實際困るから困るんです。

「なぜです？

實にしらばくれた日比の挨拶。お綿は恨めしさうにその顔を見つめて居たが、少し焦れ氣味で。

「日比さん、冗談ぢやありませんョ。妾はどんなに氣がもめるか知れやしません。人の氣も知らないで、ほんとに男は情が強いョ。

「是は實に、とんだ怨言ですチ……。成る程お察し申しますョ。實の處私も少し困るです。今迄斯うやつて中よく……ト云ふのもをかしいが、折角よいお連を得たと思つて樂んで居たのが、今此處でお母樣に來られちや、ちよつとそこが工合が惡いです、今までの樣には行きませんからチ。

「サ、そんなに譯が解つて居ながら、散々人に氣をもまして、ほんとに憎らしいョ。――ですから妾も種々考へたんですが、先刻も貴君に云つた通り、宿屋の方は親類の積に成てるのですから、今更急に余所々々敷するのもをかしなことだし、しますから、斯うした

らどうでしやう。母が來ても余所々々しくせす、矢張り今迄通り交際して居て、そして母よは妾が、貴君を學校の先生の弟御さんだと云つておきましやう。さうすればよいぢやありませんか。

「成る程、それもいゝですネ。然しそれでお母樣が得心なさるかしら。變に思はれはし、ますまいか。

「變に思はれたつて。此方さへ變でなけりやかまいませんッ。

「變でなけりやかまはないが……何だか變だから。

「變だつて、なにも變な事は……ホヽヽ變々つて、これこそ變な話だッ。ホヽヽ。

「ヘヽヽヽ

お綿は少し元氣付て

「そんならよござんすか、日比さん、貴君も其積りで居らつしやいヨ。

「よろしい、呑込みました。親類に成たり、先生の弟に成たり、役者も中々忙しい。

「ほんとに種々御心配かけて濟みませんネ、暫時の辛抱ですヨ。

「どう致しまして、どんな役でも務めますヨ。

「アヽこれでまア安心した、ほんとにお母さんなんぞ、來なくつてもいゝのにネー。

「ひどい言を云ふ方だ、云ひ付けますヨ、お母様に。
「云付るならお云付けなさい、妾は知らないからいゝ。
「直ぐすねる處が嬉しい。
「憎らしいチー、此處に居るといぢめられるから逃げやう。
捨臺辭を殘して、お絹は手拭をさげ、その儘風呂場の方へ行た。あとで日比は只一人、茶を呑みながら今の手紙を瞥見して「フヽ」。何の爲のせゝら笑か。
暫時してお絹は風呂場から出て來たが、もう日比は居なかつた。大方自分の部屋へ居つたものと尋ねもせず。ぬれた手拭を椽の欄干に掛け、脱ぎそてた餘所行の衣服を疊んで箪笥へ入れてしまつた處へ、出たは夕飯の膳、これをすまして部屋を立ち出で、庭下駄をつゝかけて、庭傳ひに日比の部屋の邊へ來て、窓の外から、
「日比さん〳〵」
二聲呼んでも返事なし。
「いやだチー、日比さん寢てるの？
ト云ひながら、外から障子をあけて見れば、影も形も……。いつも柱にかけてある帽子までない。オヤ先刻まで居たのに、何處へ行たのだらうと、思ひながら其儘引返し、自分

の部屋へもどつたが。何となく心細いので、手を鳴らしてお涙を呼び、

「アノ日比さんは何處かへ入らしつたかイ。

「ハイ、アノ先程貴孃が御湯を召して居らつしやいます時に、一寸出て來るとおつしやつてお出かけになりましたが、まだお歸りになりません。

「さう、

何しに出かけたのだらうト、不審に思ひながら、また一時間程たつと、例のお涙があわたゞしく這入て來て、

「本間さん、日比樣はお歸りになりませんヨ、只今お手紙が。

云ひながら渡した一通、不審！不審！にまづ胸さわぎ。急いで封を切て見ると。

一筆申上まゐらせ候　私事不思議の緣よりて貴孃と交際致し、いろ〱御懇情受け候へ共實は私には二世を契りし女別に澤山有之、さうは躰が續き申さず候間、貴孃との契約は一ト先取消と致し候。然し頂戴の指輪は折角の思召故此儘收めおき、之と貴孃と存じ、始終肌身を離すまじく候。御緣もあらば又重ねて、おさらば〱。

本間綿子樣　　途中にて　　日比拜

アラ！　呆れに呆れて居ると。お涙は又

「手前共へは此の端出が……

ト見せた端出、取りあげて讀み下せば、

拜啓然ば拙者急用出來致し、このまゝ出發致候間、宿料の處は本間氏よりお受取被下度候……

さてこそ曲者！　悔しさにかみしめた襦袢の袖、罪も無いよビリ〳〵〳〵。

あとは書かずともの事ながら、兎に角に不憫なはれ綿、自業自得とは云へ、まさかよこれほどの曲者とは知らず、フヘと戀風に誘はれてフヘと一杯食された悔やしさ。一週間餘の宿料、力もない身に負はせられた上、あの指輪まで、――輕しとて金の指輪、一昨年の暮ねだつて、六圓出して買つてもらつた金の指輪まで、持て行かれ。どの顏で母の前へ……ト思へば、耻かしさと悔しさで永い秋の夜も寢られゝばこそ。――翌日無事に着た母にも無事な顏見せられず、どうやら濟まぬ顏付きに、不審と問糺されて隱しもならず、思切て白狀すれば、母も聞いて腹を立てたが、例の甘い親心不埒をした娘よりは、日比と云ふ男憎くらしくてたまらず。すぐに追掛てと思ふ處を、宿屋の手前もあるとだから、無念を忍んでまづ圓くれさめはしたが、かうなると何となく極り惡く、いかよも居憎い

處から躰も大分よい方故早く歸りたいトれ綿から進めて母が到着の一日置いた翌日また東京へ引返した。

惡事は千里包んでも包みきれぬもので此事何時となく口善惡ない新聞屋の筆先に掛りはては親類朋友の手前耻かしく學校も取りかへねばならぬ仕末病氣はどうやらよく成たが肩身急に狹く成て當分の中他出無用

束髪色風琴其一　終



○近刊短評　其一

大阪　琴水女史

文學界の闇討や復讐などば一寸と中に面白いものです。春のや先生の「一足飛に大家となる法」。藤のや主人の「當世文學通」や。近頃の國民讀賣新聞なぞには時々そんな音が聞ゆる樣です

高名の元祖となりて。その他はそれが爲に消へて終るのです。露伴氏の愉快廿七則は日本の文華雜錄の主座に出ました。紅葉氏の文を文明の母の附錄第一に置かれたのと同じと名譽。名譽です。一度名さへ擧れば跡は

天下は廣(ひろい)のです。人事は數限も無(なき)が。殊更に其趣向や仕業を眞似るにも及ばんでしやう。他人のまわしで角力の取れるなら結構です。私しは嘗て新小說で三点星を讀み。今都之花の白浪を見て斯う感じたのです

君子三省といふ諺が有ます。表紙や挿畫や文字や細少な字句には常にやかましき思案外史。京鹿子を今一たび。自ら讀まれ度ものです。眉山人が見られた原稿と。今出版の京鹿子と者が違ひはしませんか

○京鹿子を讀みて　　鬼庵生

洛陽浮浪の少年。身に學なく。言に文なく。徒らに貴重なる楮君(かみ)を使用して。古人の糟粕を甞め。鸚鵡を習え得て。或は一大家を氣取り。或は漫ょ俳諧者流を學むで。而して筆硯を弄し。拙哉(せつなるかな)以て書估に投け。以て花月の資となさんとする者少しとせず。嗚呼美術文學 Belletristik の高尚なるをも解し知らず。小說は何如の趣向。

何如の体裁。何如の目的をも度外視して。却て風致を害し以て冥々の中少年少女を誤るなきよしもあらず。啻に人情的を根本とし。下情を描くに汲々乎として。其猥なるを御存知あらず　嗚呼余は嘆ず何爲ぞ　洛陽の美少年が　大早計よも才子を鼻を懸けて少しも學問を爲さゞるかと

「人情的ばかり」より外に小説にはかけないと言はんか萬事休矣

小説を著作すると申す志望はよし。然れども之を著作するには文學、上術美學なり。詞賦學なり。彫刻術上の原則なり。種々の美術文學上の思想なくてはかなわず。一通りは論理位知らなければイケズ。且つ自家の經歴もなくては無理。……先づ白髮でも生てから。かく樣（な勇氣でなければ）でなくてはペケ……實に小説家になるは難し。然し之を難しとして學ばずに居ては一生とても學位は上げられませぬ。……ソリヤ都々一博士位は許します升が……貴重なる小説〇〇は

……と箴言を老の婆心で綴りたるときに「之れ讀んでと小僧が此鬼庵よ呈したるは「きやう鹿子」一册……フヽゥ何如なれば思案外史が此等の小説をかゝれましたので升とは

外史の筆は頗る輕くして圓滑なり　人はいふ春水流と。夫れ然らむか。已みなん

巳みなん。余は實に外史の筆力を敬服すると同時よ惜むなり　何爲ぞ此下情的の人情小説を艸せらるゝ。夫れ外史の筆力あれば高尙なる小説の神髓よ溯つて　美と眞と善とを合成し以て一家的の小説なり之を世に出すや容易なる朝餐前の事たらむ。尤も外史は人情的の野乘稗官に堪能なり。是れ仕方もなし。然れども小新聞にある如き續き物語的の小趣向を廢棄して……平易なる平民的文字はよし。仇文句は使ふとてもよし。挿畵なり表紙なり頭痛に病まぬとてもよし。またよきはよし………正人君子的否高尙なる御趣向を組織せられんことを願ふて已ます。勿論小説の事なれば感情を大經緯とするは妨げず。然れども趣向さ

終りに臨み曰く。花房が小榮と絶交する決心は絶壁千仭……ブッン……妙々の才腕

○露子姫に付　　　　前　　人

少し十日の菊ではあれど。忍月子が露子姫に付申上度し。隨分世上に評言は澤山ありましたが……名作大業物ではあるが……細評もありしが……余は一寸六七行許で申上ます。忍月居士は勿論文學に深き御人なれども

詞賦の散文が小説である。詩賦は外形に趁り音調の整にして美なるを喜ぶめれど

も。小説には内容(インハルト)の美よ妍。全意の秀にして麗なるを望む而して小説は句調悪し。故よ意想の能く熟し興味の富めるを愛す　詩賦は句調あり意味は先つ第二位

露子姫は先つ現在的(ロマン、アウス、デル、ゲーゲンワルト)小説群中の妙筆なれども。意想と興味は熟せず富まずと思ひます……何故?

私は獨逸の文學を學び殊に感じたるは(戯曲なきども)「レッシング」の那丹(ナタン)と高傲(ゲューテー)、此文字は鉎廼風流士氏より)の「フハウスト」です　意味は第二位だと思ひしは誤り。何(どう)して〳〵内容も外形も一致適合して實に術藝(クンスト)の生産物(プロドクト)では第一等です。私は現今の小説家中の御少年に講釋し度う御座ります……何れまた

○道之友第一號

と稱する雑誌名古屋市の佛教婦人會より現出せり毎月一回の發刊なり論説も法話も中々面白し。女子に關する雑誌にて宗教的なるは女學雑誌なるべし耶穌教を代表す。而して此道の友は佛教を代表す實に御互よ好敵手なるべきか……飯賣はせぬ由なり……我々は販賣せられんとを希望す

大竹忠太郎君が寄稿に係る「むら竹」十三號評は餘白なきを以て次號に掲ぐと
とはなりぬ



婦人の美　求知庵の戯（たわ）れ

唯一點に付て婦人は男子より勝（すぐ）れたり。…………彼の哲學者ショッペンハウエルは素とより之を爭ひしかども…………乃ち外面に顯はるゝ身体形狀の美是なり。此美や然れともまた一様ならずかし是に於て人類學者は自ら研究すらく「何をか人間の美といふ」と而してゴルチエル（千八百六十年巴黎附人類學會に於て）が言にいふ「美なる者は一人種或は他の人種の専有とはいひ難かり。各人種には固有の美なる者ありて各異なれり故に美の規則は一般の通則には非ざるなり」と蓋し何如なる人種は何如なる模型（モデル）を以て美の標準となすや一々之を探討するは難かるべし高加索（カウカサス）人種はベルウヰデレのアポルロが肖像（羅馬のワチカ

ン宮ニあり)或はメヂチ家のウヰヌス(俱ニ希臘の神名)を以て其標準となし吾人は浮世繪諸流の美人を標準となすなり。好しや永久ある美の規則なきとても誰にても知るなり黒奴は同じく黒奴の女子を美なりとしカルミュック人は同じく其婦人を美なりと觀念するの敢て無理なる理にてはあらざるを。何如にしても白人にはラフヱル(名畫工)が美人は美なるなり。熟く思ふに體格の天然(ノルマール)にして健康なる者及び生殖作用に的實なる諸局部の何如に於て此美の成立そるを見るなり例(たと)へば健全なる齒は美麗なり高くして中正なる額は美麗なり之に反して狹小なる臀部は醜なり。何如んと問ふに髖骨の不充分なる發育は以て完全に増殖作用を了成すると能はずと知ればなり」。彫刻の點に於ても小ニ過ぎたる乳房は美麗とはせざるなり蓋し初生兒を養ふに充分の發液と輸するなかるべしと觀念すればなり。而して人情として完全なる天然を愛せざるなく不具を彈指せざるなし

彼の衣食住の何如。其風土形勢の何如。は一に人間に及ぼすの勢力にして殊に婦人の美に及ぼす所ろ尠少ならざるなり。また女子の位置何如其敎育の何如は實に非常なる關係を有するなり。また彼の貧賤の狀態力役の艱苦も同じく其醜美に及ぼすの要素なるを知るなり

夫れ風俗の異なるや實に意想の表に出づる者を以て美となせる者あり乃ち天賦の形狀に事足らずとなし人工と施し以て美を扮裝する事是なり。

支那婦人が足と縮少ならしむる。歐羅巴婦人が胸腹の間を狹小ならしむる。タヒチ諸島の婦人。合天多丁等の黑人が鼻を扁平ならしむる。ボトクーデン土蕃(巴拉西)の口唇に木片を貫きて以て廣大ならしむる等其他亞米利加土蕃が其銅色なる皮膚を猶ほ紅色に染め或は土耳古。波斯の婦人が眉。爪。手。頸。等を染め或は大洋諸島の婦人及び南米の女子。我琉球。大島。北海道土人等の文身する。或は耳に鼻に環を穿つ等同じく是れ各〻美となせばなり以て他の性の歡を買はんと欲せばなり嗚呼婦人が美の觀念は各〻人種と風俗とによつて其異なるあるを見る何ぞ夫れ奇なるや

支那婦人の足

足と縮少ならしむるは獨り支那婦人には非ざるなり歐土の少女が舞踏を學び爲にかの狹隘にして尖端なる鞾を穿ちて畸形ならしむ其不便と疼痛はいふも更なり自ら求むるの罪業は詮方なきも憐れといふべきぞかし

支那の南部の州郡には足を縮少にするとを以て美となすの風ありて殊に素封の家の娘子に行はる此風は北部には稀にして北京には絕へてなし。蓋し滿州人は此風を

採らざりしなり

然るに廣西○廣東には尤も著しき例を見るなり。蓋し此畸形に二様あり一は唯足趾を屈曲せしむる者にして一は踵部の骨の後部を鉛直に下に引き下ぐる者なり

下等の階級に在ては母親ら之を縛し。上等の家族にては之に慣れたる族人ありて其手術をぞなすなりける而して富める家にては其女の美麗に誇らんとて已に四歳。或は六七歳の時より其足を縛するの習慣なり

北京に在る佛國公使館の醫士モーラッシュが記する所に據れば先づ足を揉み而る後ち四ツの小趾を無理に腕力もて下方に屈曲す而して一寸五分許の繃帶にて之を縛し其位置に保持し日々其繃帶を交換す

繃帶したる後ちは前方に尖り裏面の平かなる深き鞾を穿たしむ此方法は重もに北部の州郡に行はる者にして足を縮少ならしむる第一着とす而して足全く屈曲せし時は足の掌面の陷入せる部に金屬もて造りたる半圓筒狀の者を入れ再び繃帶を施し且つ下肢迄も同じく縛するなり

此の如くにして足掌陷入せる鞾を穿たしむるなり其疼痛は絶ゆべからざるなりといふ之により營養を害し兩足全く脱疽に陷るとあり

全體の重量は主として踵部の小面と大趾の腸部とに在るを以て女子は其歩確かならず杖に倚り或は婢女子に扶けられ始めて歩行するを得るなり嗚呼金蓮凌波歩とは何如なる形容なるや其慘憺なるを覺ふなり

○女學生の矯風を論じ併せて文明の母に望む

加藤櫻雲

讀書知字亦何成。修得萬能忘一貞。雪案春深方駘蕩。螢窓夜暗不分明。袂邊蛺蝶飛無影。髪上薔薇落有聲。稗史在牀看既熟。如今演出卷中情。とは此頃世間に醜聲高き女學生の品行に題せる一首なりとて新聞紙上に掲ぐる所なり。余輩素より其何事なるやを知らずと雖も。方今の女學生豈に斯る醜聲の實あらんやとは余輩も亦決して保証し能はざる所なり。凡そ世間に流傳する所の事。概ね隱約の間に出没すと雖も而も亦幾多の實跡なくして止む者はあらず夫の影を見て時に形に數倍するの大さを現はすといへども而も形なきに影あるを知らず。又夫の響を聞け其度聲に幾倍するものありと雖も而も聲なきに響あるを聞かず。凡そ物形ありて而して後ち始めて影を現はし聲ありて而して後ち始めて響を生ずるは自然の原則なりと雖も。聲

なきに響を生じ。形なきに影を顯すもの未だ嘗てこれあらざるなり。女學生今日の醜聲亦猶は影と響との如き乎。其世間に流傳する所或は事實に幾倍するものありと雖も而も亦幾多の實蹟なきにあらざるべし豈に痛歎の至ならずや

抑も世人をして女學生の醜行を喧囂せしめ妙齡の淑女をして醜聲の裡に呻吟せしむる者其罪果して誰にかある。世人は將さに言んとす是れ學校敎育の罪なりと。余輩も亦素より此判決に不服を訴ふる者にあらず。然れとも學校に代りて聊か世人に控訴する所なくんばあらず。方今我邦の女學校たるや敎育學の理法上より其編制の不良を感ずるのみならず。身其敎授に任じ管理の責に當る者にして亦往々不德の聲聞なきに非ず。今日世人が女學校を目して媒妁所なり待合所なりと嘲けり　遂に女學校を處するに遠島の刑を以てせんとする者あるに至りしも蓋し亦故あきにあらず。世の女子敎育に任ずる者大に猛省する所なかるべからず。然れとも女學生の醜行を擧て女學校の罪なりと宣告するに至りては聊か殘忍の處刑たるを免れず。學校の規則も改良せば則ち女學生の品行を進むべしとは未だ偏見の誹りなきを得ず。然らば則ち女學生の醜行に關し共犯の罪に坐すべき者誰ぞ曰く社會…………日本の社會……日本の夫人社會是なり。我邦現今の夫人社會こそ實に女學生をして其淑德を紊乱せ

しむるの媒たらざるなきを得んや請ふ試みに今日の夫人社會を觀察し來れ其道德は果して堅固なる乎。其風儀果して嚴肅なる乎。蓋し肯定の答を期する難かるべし否な肯定の答を期し難きのみならず少しく其裏面を伺はゞ。百鬼夜行の觀なき能はず抑〻天下の淑德を代表し。億萬女子の摸範たるべき任を負ふ者にして往々京童の口頭にかゝるべき醜行なきにあらずや。妙齡女子の生活を律すべき。上流社會の家庭にして往々校書的の風儀を摸するなきか其他演劇に寄席に。小說に小新聞に雜誌に社會の環象一として妙齡女子の風儀を紊すの媒たらざる者尠なし。嗚呼今日の女子は斯る夫人社會を見習ひ。斯る家風に生長し。斯る環象に接するの境遇たり豈によく其風儀を促がすべけんや。豈に能く其品行を進むべけんや。況んや幾多の學識を脩め心私かにれ顛婆博士を期するの女學生に於てれや

由此觀之るに女學生をして今日の醜聲あらしむる者は獨り學校敎育の罪にあらず社會亦共犯の責に任せざるべからず。左れば女學生の品行を進めんと欲せば須らく先づ夫人社會の風儀を矯正せざるべからず。夫人社會の風儀を矯正せずして獨り女學生の品行を責むるは蓋し凡庸刀圭の謗を免れず。嗚呼何れの日か能く病苦の根を絕ん。然れとも夫人社會の風儀を矯正する亦容易の業にあらず其方策大に愼重せざ

るべからず。余輩は其一策として世人に獻せんと欲する者は

一、夫婦の身分を撰ぶと　即ち無姓乘玉輿的の夫人を減ずると

二、夫人社會の交際をして西洋風を脱せしむると

三、貴夫人社會の夜會等凡て男女混合の西洋的公會を廢すると

四、完全なる宗教を信奉せしむると

の教育なり又女學生の風儀品行を改むるには先ヅ

一、女學生をして悉く父母親戚の家に寄宿せしむること。但し女學校より時々女學生の宿所を監察し。其女德を紊すの影響あると認むるときは証人に忠告すると　証人若し忠告に從はざるときは生徒を退學せしむる事

二、女學校の設置。及び其設立者教員の資格を嚴にすると

三、女學生に演劇、寄席、舞踏會等凡そ公會に出るを禁すると

四、女學生をして或る小新聞、雜誌、小説等を讀ましめざると

五、女學生をして完全なる宗教を信奉せしめ、日曜日等には説教を聽聞せしむると、

等の制を施かざるべからず

此數策の外、社會敎育を進むると女德矯正の最急務なりと雖も論旨少しく他岐に渉るの恐あれば玆に贅せず。又此數策よ關する理由引證の如きは他日重ねて論ずる所あるべし

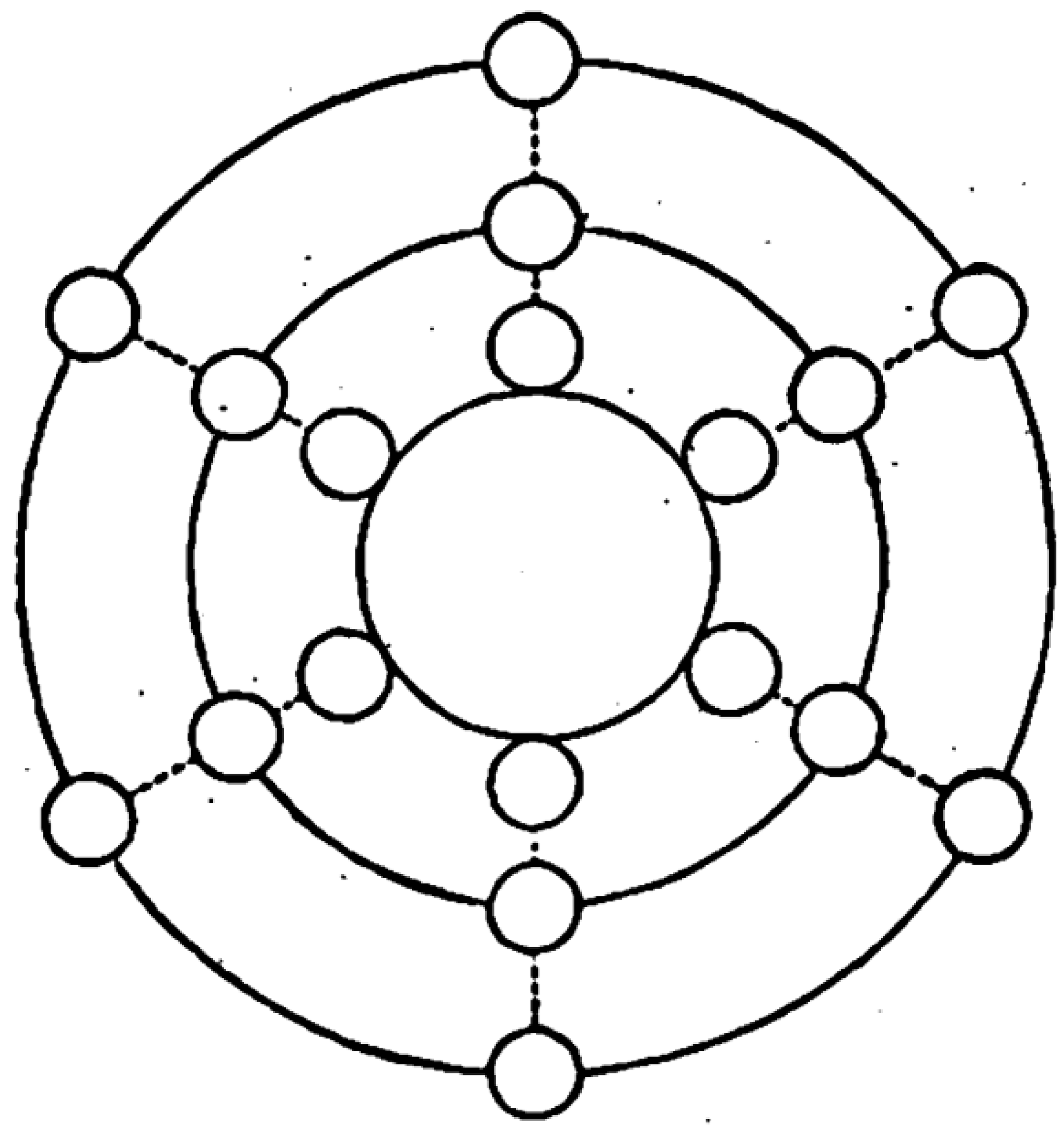
余が此矯風策たるや夫の開化を扮する洋浴者流又は交際場裡に艶名と搏する風流粹士の意に投せざる者多かるべしと雖も。此輩者流の意に投せんと亦素より余が希望に非ず。一意余が望を囑する所は　文明の母にあり又文明之母を愛讀せらるゝ諸君にあり。嗚呼文明之母よ。愛讀者諸君よ。苟くも我邦の女德を進め我女學生の風を矯正せんと欲せば請ふ余が卑見を贅するに躊躇する勿れ……

○餘興（懸賞）

圓陣問題

(1)

上圖の如く正圓が並へてあります　其中へ「一ヨリ十九マデ」……但し七ダケハ除キ……十八個の數を程能く並べて三徑三周廻何れも其合數　六十一　ッヽにするよは、どうならべればよろしいか



（右大坂　琴水女史出案）

四十五

(2) 或る一樹に鳥卵の在るを見て之を撿せしに其卵の中は空なりしと云ふ何の樹なるや
(右丹後　河田力藏氏出題)

(3) 姉妹の女子に年齡を問ひましたら口を揃へて「人が居なけりや二人の年を木の名一字で答へましよ」と唄ひました　各何歳です？

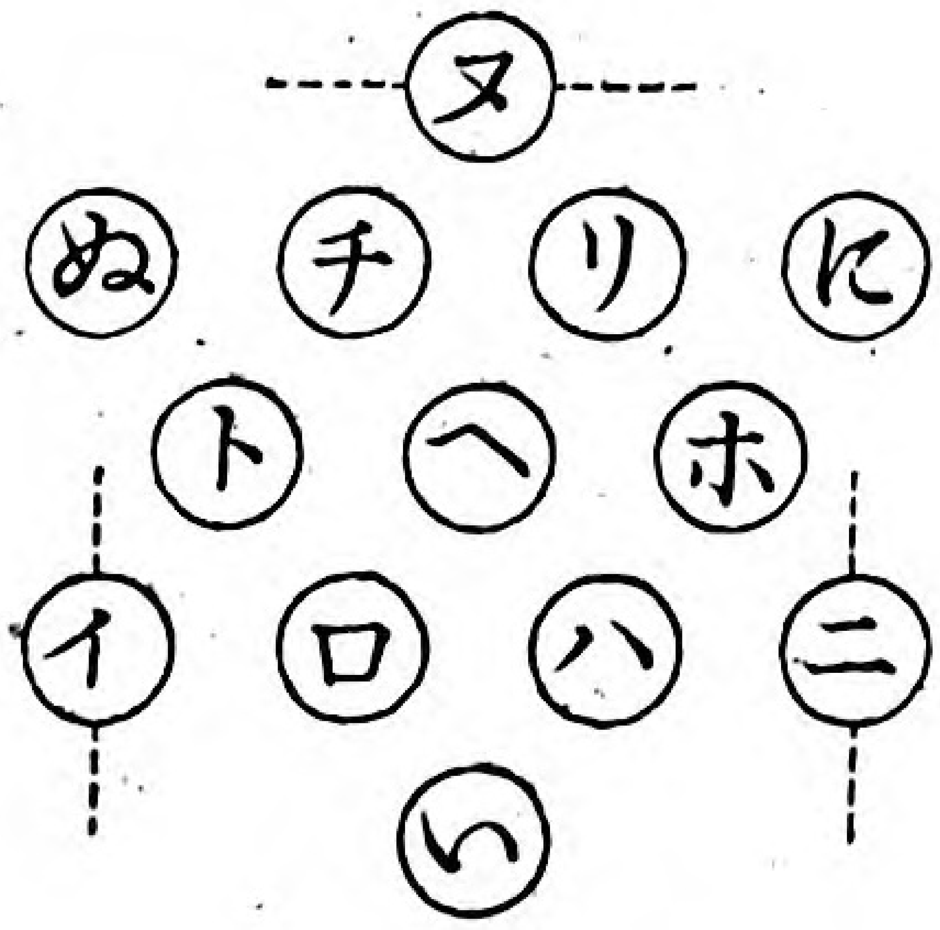
(4) 甲乙二人其生國を語るあり甲曰く僕の生國は君の生國より中の假名一字多しと二人の生國は各何處です？
(右東京　松浦　猷氏出題)

○前々號(十九号)の考物解答。　解答者七十二人、悉くれ當てなつた御方は三十八人でした。

1. 東京の人は一發の午砲(ドン)を聞きて十二時なるを知り、田舍の人は八百屋の出だを見て市なるを知るなり。

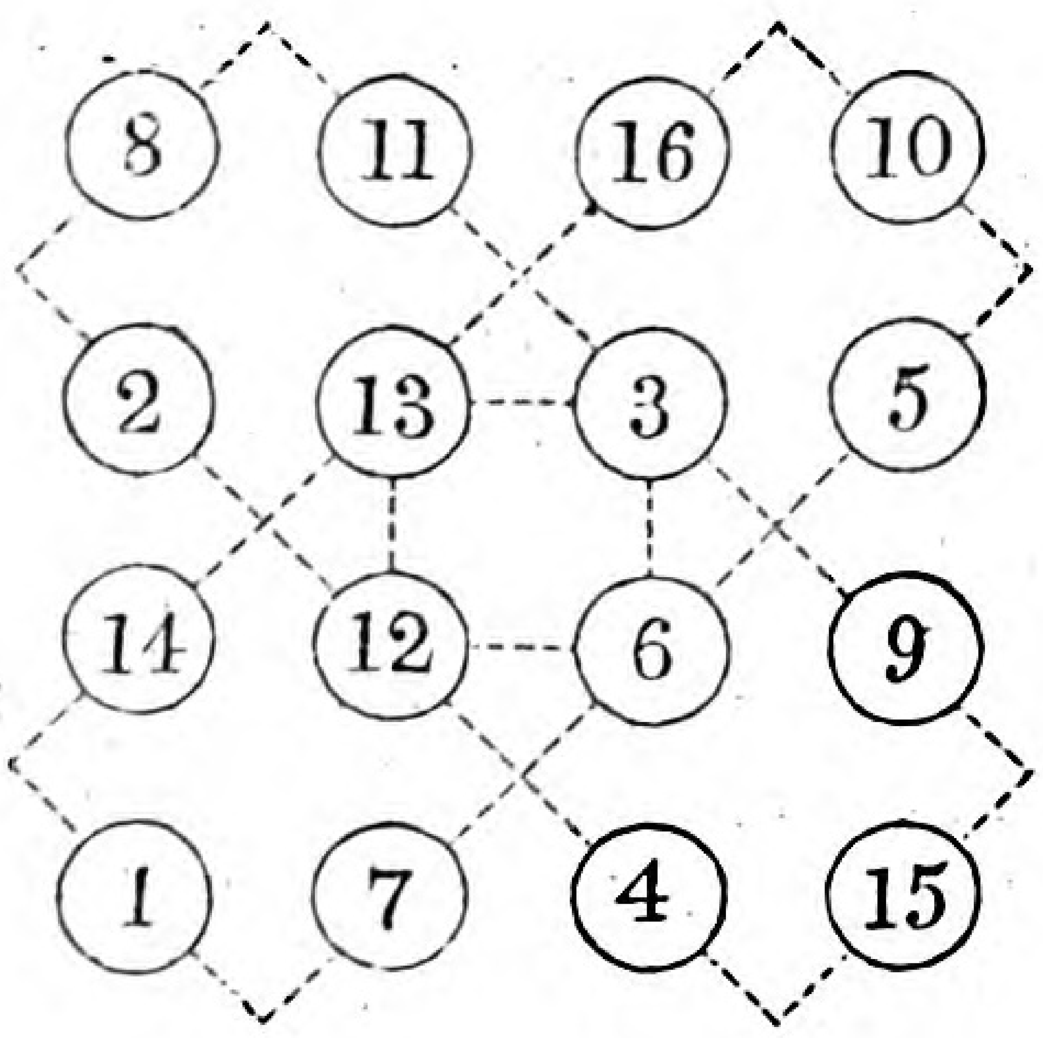
2. 醒めたら來(こ)い。(鮫、大口魚、鯉)

3.

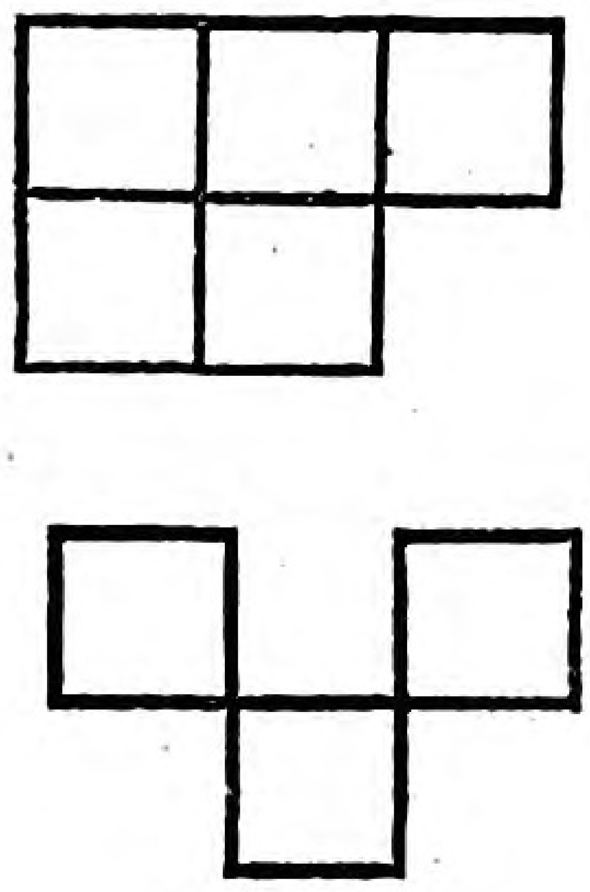


斯うするのです。

4.



5.



6. 鵜、鷺、(兎)

7. Ans. 11. Because Each is a name of boy.



〇內國勸業博覽會

は去月二十六日を以て開場の式を擧行せられぬ而して　聖上皇后兩陛下は之に臨ませ玉ひ　敕語を下し賜へき。熟〻惟みるに殖産興業は目下の急務にして之を進め之を勵み以て富國の道を立つるは政治經濟上樞要の者たり夫れ地方には自ら良千石の在るあり其物産上にまれ興業上にまれ必ず此が管理を爲さるゝなるべし而して幾多の指揮と訓諭とに由り國家の利益となるべき者に注意し物品は益〻精良を極めて實用に適し事業は愈〻着實に歸して迂濶に流れず日進の開化は滔々として是れ實用主義にして彼の纎巧浮華的ならざるを勉むるを敎導せられしなるべし」今や之を一公園の一場に駢列し以て之を證明する時とはなりぬ此會や亦た觀客をして必ず利益せしむる所あるなり夫れ粹を萃め美を擇びたる此會、實を競ひ利を較ぶの此會、觀る者敢て他の觀をなす勿れ

〇東台の花盛り

今を去る二十有餘年。三十六僧房兵燹に罹りたる榮枯を閲し來りし此の朝日に旭ふ山櫻花は今や今を盛りと咲きみだるゝなり。滿都の綺羅獨り集れるのみならず博覽會の爲め地方より出掛け來りし人士。また此に群集す。況んや美術展覽會あり。花を觀るの綺羅紛壓、博覽會觀客の雜遝。美術を賞覽するの風韻瀟洒、一にこゝに集まるなり。此花や咲ても榮あり、散ても榮あり。眞に花の都なるかも、

〇海陸の兵を名古屋に會す

去月二十八日よりの大演習……恐れ多くも至尊躬ら統監の任に當らせ給ひ。砲烟彈霧は遠く太平洋に靡びきて。旭旗の威は東洋に赫々たり、思ふに是れ本日は　皇祖神武天皇登極以來二千五百五十年なり　至尊は　皇祖の大祭祝日に先だち未曾有の大演習を執行せさせ玉ふ嗚呼盛事なるかな而して大政維新兵革玆改まり　至尊陛下躬つから統監し玉ひ海陸攻守の練習を親閲し玉ふ事今回ぞ嚆矢なりける洵に以て盛事といふも。恐れ多かり

〇皇后陛下

は明四日を以て御發輿あらせられ五日には

天皇　皇后兩陛下名古屋より京都に御着、御所御駐輦と承り及びぬ

○女子高等師範學校

勅令第四十二號に云く「高等師範學校中女子部を分離して女子高等師範學校と爲す」と此分離特立は教育政上大便宜なるべきなり何如となれば教育の方針は男女其趣を異にするは論を俟たず其經費といひ其役員といひ皆な異ならざるを得ざればなり故に勅令は同時に其等官制中改正の件をも裁可せり女子師範教育の益〻完全に赴くは國家の爲めに大賀せざるを得ず

○高等女學校

勅令第四十三號の文中「東京高等女學校の七字を削る」(去月二十五日發布)と在るにより文部省直轄に屬する一ッ橋外なる東京高等女學校は自然消滅に歸したり。然れども同女學校は女子高等師範學校の附屬として今日の儘に維持するなり而して聞說く同女學校の教員は重もに女子高等師範學校の卒業女生より採用する趣なり

此變革により同女學校は去月廿六日より授業を休止し今月七八日より再び之を始むるといふ(試驗休)

思ふに女子教育は在來の者にては未だ適當といふべからず其授業規則たる改めざるべからざる者多きに居るなり實際其課目の如きは多くして徒らに女生

を苦しましむるに過ぎず元來十四五歲より女子は重もに身體發育し生理心發生し萌芽するの時にて充分に體育を要するの時なり然るに之を顧みず理化の難き者幾何の難き者動物植物に經濟論理に一として容易ならぬ學課を置き身体の軟弱なる者に英語といひ作文といひ勞心堪えざる者を學ばしむるあり爲めに身体勢力の幾分を奪ひ去り成年發育期の發育をして充分ならしめず大に萎靡せしめて以て益〻懦弱たらしむるなり

嗚呼夫れ富國强兵の源は健全なる母にあり此健全なるの母を養育するは是れ却て女子高等教育の目的なるべきなり

單簡に改良すべき箇條を陳すれば

一、在來の時間を短縮して午前位となすと

二、至難なる科目を廢すと

の如し是れ吾人の熱望して已まざる所なり

○獨逸老皇后

獨逸老帝(維廉第一)の后アウグスタ陛下は頃日薨去せられぬ此后の賢明におはせしはいふ迄もなし殊に衛生の道に專心盡力せられしなり赤十字社、獨逸女子義會、臨時軍隊女子義會、看護婦會等は皆な后を仰きて會長となし統監とせり

伯林府にアウグスタ病院なるあり是れ后が創立せし者にて自ら此に臨み看護の勞を取り熱心にも之を

保護せられしなり
千八百八十三年には自ら會長となりて「衛生及救急法普通獨逸博覽會を開き玉ひぬ實に后の有力にして豪邁なるは歐洲の皇后中。稀に見し處なり

○又アッケルマン孃に付

孃が禁酒の演說をなされて何如にも骨を折らるゝは見事と見受られぬ然れども孃も隨分、見譯の付ぬ人と考らる、何の故ぞ、夫れ我邦の女子は酒に沉湎して身を誤る多きや犯罪する者果たして夥しきや。之を歐米に比ぶれば何如。嗚呼歐米に比ぶれば何如。吾人は之を我邦の警察上犯罪表を一目するに女子昏醉して罪を犯せし者は殆んど見當らず。夫れ孃は今や禁酒を說き道德を論じ以て我邦の女子が飮酒を未然に防がんと欲するか。實に有難き御世話といふべきなり

孃よ英國に行て禁酒の必要を說け英國の女子は酒に昏醉して罪と犯す次の如く多し

マンチュスタア府まて千八百四十七年より千八百五十一年間に於て昏醉して警察の厄介となりし者

男九百三十五人　女二百七八、

千八百五十二年より千八百五十六年迄

男六百五十一人　女八十四人

千八百六十七年より同七十一年迄

男七千九百三八　女二千一人

千八百七十二年より千八百七十六年迄

男七千二十八　女二千八百一人

之より劇しきは「リバープール」府なり昏醉して警察に捕へられたる者千八百五十八年には

女四千三百四十九人

千八百六十四年には

女五千六百七十六人

「グラスゴー」府に於ては千八百五十年より同六十年迄の統計よ徵するに女子の昏醉犯罪者男子の數よ超ゆ嗚呼實に是れ婦女子が腐敗するの徵候なるべし。嗚呼孃よ我邦の如き奇麗なる婦女子は一二の限詞せられたる社會より他よ。酒を飮みて………昏醉する者は殆んとなし矣………寧ろ去つて英國へでもと御忠告申すなり

○娼妓存廢に關する外山文學博士の議論

此の娼妓存廢は文學社會を動搖せしなり嘗て見る黑川眞賴文學博士も一の遊女學校を創立してはなど珍奇なる論說を公にしられしを又加藤博士も廢娼妓廢藝妓孰れか急務なる」と唱道せられぬ然る處に又もや外山博士は雄辨滔々として「加藤天則博士に質し廢娼論者存娼論者よ告くといふ題を以て天下を驚かさんとの身搆へ」にて論せられたり………大日本私立衛生會にて………

果して天下驚きたりや
加藤天則博士の廢藝妓論は急務之れより先にありとて駁撃を蒙りたれど天則博士は同じく廢妾とも忠告しつゝあり……外山博士は今や廢妾を唱へて天下と驚かさんと思れしなり其說御尤と存ドぬ次に存娼論者を駁撃して餘類なからしめたるは中々の出來なれどよ吾人とても夙に之を言へり又廢娼論者の偏見を嘲笑せられたるは之も御尤もなり思ふに廢娼論者の主として宗敎上するは偏なり廣く社會上より觀察せねばならざるなり獨りまた衛生上よりのみならず……博士の議論は別に之れとてなし啻た廢妾の急務を論せしのみ其他は餘波のみ出色の文句時々現出するのみ

○女子敎育の急務

娼の存廢は措て論せず女子敎育の急務の必用なるを感じて已まず殊に德育の要を見るなり。讀賣新聞の醜行論は兎に角に。此頃の女子の服裝あり何なり少しく美に失し若くは粗に過ぎたるあり或は言語なり、鄙か野か。實に敎育の充分ならざるに痛嘆すとは此ㇾ憂世家の憂言にして吾人の現今頻りに聞く所なり嗚呼女子敎育の急務を見るなり國粋的に儒敎的に非舞踏的よ非西洋的に折衷取正的に

質疑

○此頃ろ人に聞かれまして私如き好稗史家も閉口したのは「鬼卵といふ小說家は何時頃で何樣なる著作がある」と問はれた時でした。よつて御尋いたしまそ　大阪　鶯の舍女史

○戀川春町といふ人の繪を所有してれりますが名高き人でありますか　仙臺　しづ子

○女子犯罪上女子は何如なる責めを受くるが理學的だか法科大學の御方にれ伺ひ致します　小石川ＭＳ生

○女子分娩の際よ於て各邦土の人民其仕方を異にするならんと思ひ居り候何卒何如なる者にや御敎示相願上まするは　向嶋小梅村頭に住む婆

○文明の母每號に於て見ぬとはなき鈍廼風流士とは何如なる理由の人で升か。また出處ありてかく申さにゝにや御漏しあらば幸甚々々　一女學校寄宿のH（エッチ）

○文明の母第廿一號よある近藤醫學士の「こともの爲め」は中々面白く讀み侍りぬ早く次の御稿を見まほしく侍るなり　本鄕の一愚母さく子

○今は花の盛り……芳野の花盛り……芳野といふ櫻は何如なる櫻でェ、?　下谷小僧ＡＢＣ拜

寄書

○秋暮（西詩譯韻法原詩の儘）　西京　寂松道人

杖を曳く、秋の夕暮に。
木の葉、ちら〳〵と風に散りこふ。
思ひめぐらせば、春も彌生のなかごろに。
柳櫻の錦、踏みわけしも、きのふ、けふ。
ア丶、今はいづこに、恐ろしき、冬の雪、夏の雲さへも。
仰げば、ハヤ、月、鏡を磨き、俯けば池面の水も。

○文明の母を讀みて

附平郡廣成の母　東京　柳月居士

昔時遣唐使の容易ならざりしは人のよく知るところなり。そが故に郷に遺りしもの丶、空しく思ひを萬里の曉月に傾けてその夫を慕ひ、書を三春の暮雁に託し難くて、その子を思ひし種々の奇談も少なからねど、概ね徒らに別れを惜むのみ。平郡の千左登が如き賢婦は中々に多く得難かるべし。

平郡の朝臣廣成の母千里は、廣成を幼時より教訓すると正しく、そが交友のふみよみ物書きなんどしこ、よき人來れば、母自から酒肴を整へ手厚く是をもてなし、若しよからぬ人の來る時は、引籠りふして物をも食はざるとかや。故に廣成少しもあしき友と交らず、長じて博識を以て一世に知らる丶に至る。天正の五年、廣成遣唐使に命ぜられて唐へおもむく時、千左登言葉をつく〳〵して曰く、此遣唐使は人倫の規摸なりといへども、若し鹿忽のとあらば我　大皇國の玼ともなりて、末代これを滑むると難かるべし、我今汝にわかる丶とかなしといへども、言葉に出すにたらず、願ふは猶この後あしき名をとりて、歎きを我にかくる如きとゆめあるべからず、とくれ〳〵も教訓して、餞別に

旅人の、やどりせん野に、霜ふらば、わが子はごくめ、あまの鶴むら。

とよみてつかわしけるとなん。

嗚呼此母にしてこの子あり、明治の聖代千里が如き賢婦を生む者は誰ぞ、廣成の母が如きものは誰ぞ、と問はれなば予は欣然として答へん、文明の母のほかまた他になかるべしと。

○文明の母第廿號を讀む　東京　美　鷲　山　人

余は文明の母の號をかさぬるに從ひ、名聲の益々加はるを見て轉々喜にたへず。さりながらよきものはなほもよかれとのぞむは人情にあなれば、不敬をも顧みず左の蕪言を呈するに至りぬ。もとより敬愛のあまりのくり言と見たまはゝ、いと〳〵喜ばしく候らへ。

一印刷校訂のたらぬが如くに見ゆ。
一社說　いかにも熱心にして注意到れり。
一家政　關場醫學士育兒衛生法殊にめでたし。漫求と共に光華ありとやいはん。
一竹取翁物語講義　緻密にして彌々面白し。唯なるべくは每號に揭げられんことを、余やこれ無きを見れば、文藝は花のみにして實なき心地す。
一小說　久しく將軍の著に接せず。余は其の淋しきものを見たし。
一批評　あまり詳細ならず、「は、のつとめ」の如き批評こそ、真に批評の價値あり。
一雜錄　百花句へり、唯餘興に至つては期日を定めてはいかゞ。

○○君ニ一言ス　信濃　古　内　北　洲

余固トヨリ君ト一面識ナシ、然リト雖モ余ハ二月三日發行ノ文明のは丶第十八號、雜錄餘興ニ於テ君ガ出題セル考物ヲ拜讀シ、茲ニ始メテ君ト相知ルヲ得タリ。只疑ラクハ余ガ先年購讀セシ日本之少年第十八號遊戯園ニ揭載シアリタル、安江稻三郎君ノ出題ニ係ル考物ト異ナルコナシ。（漢文体ニ直シタレモ）是レ君ノ此考物ヲ盜ミシニアラズンバ、豈ニ此ノ如ク奇妙ニ符合スベケンヤ。君ヨ願ハクハ以後斯ル手段ヲ用ヒ、此貴重ナル紙面ヲ汚スナカランコヲ。

文明之母第二十號目次

文明之母第二十一號目次

一

道之友第壹號目錄

發行所　愛知縣名古屋市茶屋町番外　佛教婦人會

金剛第十號　明治二十三年三月廿七日　二

目次

發行所　越後國中頸城郡太崎村字小出雲　披雲會事務所

長島書店出板書目

東京專門學校
明治法律學校
警官練習所
講師 日本 佛國 法律學士 大審院檢事
法律取調報告委員
從五位 磯部四郎先生講義
門人 都澤敬二郎君筆記

憲法講義 全一冊

洋綴總クロース金文字入美製本紙數六百五十頁余實價金九拾錢郵税金三拾六錢

附 議院法。衆議院議員選擧法。會計法及貴族院令講義
皇室典範。皇族列次及衆議院議員選擧法 附錄

右ハ實力ト經驗トヲ以テ法律社會ニ名聲赫々タル磯部四郎先生ノ講義セラレタルモノニシテ解釋ノ確實正當ナル文章ノ平易流暢ナル遠ク他書ノ及バサル所ナリ當時憲法ノ註釋或ハ正解等ノ名ヲ以テ梓ニ上ルモノ其數幾十種ナルヲ知ラズ然レ𪜈投機者ノ一夜作ニナリタルモノニシテ實ニ見ルニ忍ビザルモノ多ク只徒ラニ文章上ニノミ拘泥シテ毫モ深意ノ存スル所ニ着目セズ亦國家ノ基本タル大憲法ヲ謬ラシム此書ヤ前書ノ比ニアラズ憲法ノ正條ニヨリ議院法衆議院議員選擧法會計法及貴族院令ノ各條ニ付確實正當ナル解釋ヲ下シ且ツ重大ノ問題ニ關シテハ一々各國憲法ヲ參照セシモノナリ此書ヲ繙キテ初テ憲法ノ深意ノアル所ヲ知ルヲ得ベシ殊ニ帝國議會ノ最モ主要ノ問題タル會計法ノ如キハ却テ他書ノ忽ニセシ所ナリト雖此書ハ務メテ綿密ニ解釋ヲ下セシモノナリ此書ヲ繙クモノ宜シク注意シテ此廣告ノ誣言ニ非ルヲ知リ賜ハンコトヲ希望ス

松永伍作演述

改正増補 養蠶術講義 全一冊

賣價貳拾錢
郵税拾錢

蠶糸業組合中央部藏板

該書ハ學理ニ明ニ實驗ニ富タル松永伍作氏ノ講義セラレタルモノニシテ其有益無害ニシテ實業家ノ座右ニ欠ク可ラサル良書タルヿハ世間一般ノ信シテ疑ハサル所ナリ然レ𪜈之カ出板發賣ハ擧テ蠶糸業組合中央部ニ委任セラレタレハ印刷製造等ハ鮮明美麗ナルモ愛讀諸君ヲシテ購求上不便ヲ感セシムルト價格ノ廉ナラサル等ノ弊ヲ脱レス之レ此書ノ欠點トナス所ニ御座候奚ニ於テカ今般弊舖等同部ト謀リ販賣ノ事務一切ヲ擔任シ價格ハ廉ニシ賣買上ハ簡便ニシ益此書ヲメ欠點ナカラシメンヿヲ期ス請フ陸續御註文アランヿヲ尚左記ノ書籍出板發賣仕候間前書同樣御愛讀アランヿヲ奉希望候敬白

三

蠶糸業組合中央部幹事全員　鈴木善恭校閲
大塚良太郎著

蠶業家必携　全一册

實價廿四錢
郵税拾錢

東京高等商業學校長矢野二郎先生
東京府尋常中學校長丸山淑人先生　賛成
遠藤孝一先生編纂

英語作文全書

實價三十錢
郵税拾八錢

英語ノ緊要ナルハ今更喋々ヲ要セサルナリ而シテ此類ノ書世間又少シトナサス然レヒ多クハ日本ニアリテ纂輯セラレタルモノナレハ往々語格ノ誤謬ヲ免レズ本書ハ遠藤先生嘗テ英國「オックスホルト」大學ニ在ルノ日之カ起草ニ着手シ爾來佛都ヨリ英國ニ官遊六星霜ノ間常ニ座右ヲ離サス屢翻閲シテ語格ノ異同ヲ考ヘ誤謬ヲ訂シ歸朝ノ後尚學友高等商業學校長矢野二郎君中學校長丸山淑人君ニ計リ刪補シテ初メテ世ニ公ニセラレシモノナレハ語格ノ正確ナル文詞ノ雅馴ナル遠ク他書ノ及ヘサル所ナリ英語作文等ヲ學ハント欲スルモノ此書ヲ繙カハ大ニ益スル所アルヘシ

淺井得二郎抄譯

英和學校用會話篇　全二册

實價三十五錢
郵税廿四錢

該書ハ有名ナル淺井先生ノ著ニシテ府下各公私立學校ノ教科書ニ採用セラレ頗ル好評ノ良書ナリ請フ本次ヲ購フテ座右ニ備ヘラレンヿヲ

四

英國農學博士ヘンリータンチル氏原著
日本農學士
農藝化學士　酒勾常明先生校閲
同　蘆葉六郎先生譯述

農學楷梯　全一册

紙質上等　紙員二百頁
實價三拾六錢　郵税拾二錢

學説ト實驗ト相須チテ働ヲ爲スヘキハ何事ニ限ラス肝要ノ事ナルカ我國ノ農業ハ昔時ヨリ拓ケタレトヒ兎角學説ト實驗ト一致ノ働キヲ爲サス只父祖傳來ノ舊慣ヲ墨守スルニヨリ爾來進歩極メテ遲緩ナリ泰西ハ此ニ反ル學理ノ應用ヲ爲シテ駸進セシニヨリ僅々數十年ノ間ニ共進歩ノ懸隔實ニ著シキヲ見ル所以ナリ故ニ今日ノ識者ハ日本ノ農業ヲ擴張スルニハ農學ノ改良普及ヲ以テ第一ノ急務トセリ本書ハ原名ヲ「フオースト、プリンシプルス、オフ、アグリカルチユール」ト題シ英國農學博士ヘンリータンチル氏ノ著ニ係リ專ラ小學生徒ニ供フルモノナレハ務メテ日常卑近ノ語ヲ以テ懇ロニ説明ヲ加ヒ初學ノ徒ニ解シ易カラシム其所説全ク農學ノ初歩ニ止マルト雖モ論理實用共ニ先人未發ノ新説アルヲ以テ大ニ世上ノ好評ヲ博シ遍ク各國ニ傳播セリ先年蘆葉先生歐米漫遊ノ際英京倫敦ニテ之ヲ購ヒ今回譯シテ農學楷梯ト名ク蓋シ農業ノ原理ト實用トヲ論シタルハ此書ヲ措イテ他ニ優ルモノナシ苟モ農業改良ヲ希望スル諸君ハ此書ニ就テ講習セハ裨益スル所大ナルヘシ且ツ印刷ノ鮮明ニシテ製本ノ美麗ニ加フルニ代價ノ低廉ナルハ從來弊舗ノ世ニ誇ル所ナリ希フ江湖ノ諸彥幸ニ御愛讀アランヿヲ

○內務大臣松方伯題辭　○高橋健三先生序
○法學博士バリストル岡村輝彦先生序　○法學士岡山兼吉先生序
○川瀨周次先生○田中迪三先生合著

再版

市町村議員必携

洋裝全壹冊
總クロース
金文字入美製本
紙數四百頁

上等製賣價四拾八錢　郵送税金八錢　別製賣價三十六錢　郵送税金六錢

本書ハ歐米諸國ノ自治制幷ニ之ニ關スル諸大家ノ名論卓説ヲ參照シテ著ハサレタル者ナリ

○第壹編ハ自治全体ニ關スル事即自治ノ起因、定義、組織、集權、分權、自治ノ利益立憲政體ノ關係等
○第二編ハ議員ノ資格之ヲ失フ場合、辭職、退職、人民トノ關係、撰擧ノ諸權、投票、當撰、各訴訟等
○第三編ハ市町村會ノ本義、開閉會、議事法、議決ノ諸説、吏員ノ關係、市町村組合等
○第四編ハ市町村ノ財產、市町村税、公債、各權利義務等ノ議決、吏員ノ選擧、裁決意見提出等
○第五編ハ內務大藏兩大臣、府縣郡參事會ノ監督等

其他右ニ關スル大疑問等苟シクモ自治代議機關ニ關スル事ハ大小網羅シ實ニ自治制御發布後一ノ類似ナキ一大良書ナリ市町村議員吏員ハ勿論市町村住民タル者座右ニ缺ク可カラサルコトハ各先生ノ序文ニ於テモ明カナリ江湖ノ諸君續々御購求アランコトヲ伏テ奉希望候

南翠外史著

再板

小説 唐松操（うらまつみさを） 全

總クロース
金字入最上美本
賣價廿八錢
遞送税四錢

苟くも目に小説を見るものは我が文壇の老將に須藤南翠其人あるを記せざるはあらざるべし南翠先生の文章は流麗婉曲よして讀む者倦むを覺えず南翠先生の想像は富贍强大にして千百盡くるを知らず其の婉麗なる筆を以て其の豐贍なる奇想を描きたるものは我が「唐松操」とす此書唐松操なる一浪士が妖怪を退治て大いに英名を京攝の間に轟かし進んで天下の大法官となり大義高潔の名を得るよ終ると雖も其間幾多の轗軻不遇を寫して剩さず理想と見れば理想、歷史と見れば歷史、寓意と見れば寓意、其の結搆したる所の境遇は讀者の境遇に依つて如何にとも觀察を下さるべし是れ「唐松操」が出色の妙地なりと爲す論より證據先づ一本を購ふて繙き給はゝ書肆の多辨を俟たずして快と呼び奇と叫び妙と稱へらるゝと疑ひなし

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地
發行所 文昌堂 長島恭三郎

（遞信省認可）
明治二十三年四月三日印刷出版

（東京神田區柳原河岸錦巷堂印刷）